
新蘭パラレル 番外編

タイム

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

新蘭パラレル 番外編

【Nコード】

N8695V

【作者名】

タイム

【あらすじ】

新蘭パラレルの番外編です。

2人の初デートなどを書いていきたいと思えます。

結婚や妊娠話も書こうかなあ〜と今、思っておりますww

学校での・・・

「悪い・・・遅れた・・・!!」

「ううん、大丈夫だよ」

恋人になってから初のデート。

行先はトロピカルランドだ。

その後・・・

それはそれは園子やクラスメイトにからかわれた。

”キスはもうしたのー？” だの”そのラブラブを俺たちにもわけろー!!!” だのクラス全員 恐らく、新一を狙っていた女子や、蘭を狙っていた男子以外・・・ が口々に言った。

しかし、園子のほうがもっとスゴかった。

「あの全く女に流れなかった工藤新一に恋人が出来たのよ！ただの男じゃなくて、あの高校生名探偵工藤新一！！これは盛大にパーティーしなきゃねっ」

とかなんとか言って、先生に許可まで貰い（嘘だろ！？by・新一）

放課後の時間を使って始めたのだ。

パーティーまでは新一と蘭は図書室に追いやられ、園子たちは教室をキラッキラのピッカピカにした。

そして・・・

「じゃーん!!」

黒板にドーンと”工藤君、毛利さん、おめでとう!!!”と太文字で書いてあり、パーン!とクラス全員でクラッカーを鳴らした。

2人の反応は・・・

「・・・・・・・・・・は?」

「・・・・・・・・・・何コレ?」

開いた口がふさがらないという状態で教室とは思えない教室を見渡す。

「レディースアンドジェントルメン!これより、新一君と蘭の恋人記念パーティーを始めます!!」

園子がどこからか持ってきたマイクを使い、皆に呼びかける。

「イエーイー!!」

それから、ドンチャン騒ぎと2人へのからかいが始まる。

特に新一は、「何て告白したの!」と散々言われ疲れきったとい
う……

「んじゃ、行くか」

「うん」

どちらともなく手をつないで歩き出す……

初デート1 く蘭く

「……………」

「……………」

は、恥ずかしいっ

これから、どーしょ！

新一も恥ずかしそうにそっぽ向いたまんまだし…

な、何か話題出さなきゃっ

「ね、ねえ！何乗るっ?？」

ちょっと焦った声だったけど、大丈夫だよね？

「ん？妙に声高くなってっけど、だいじょーぶか?…まあ、俺はなんでもいいぜ?」

あ、ヤバ…バレてる

「じゃあさっ、コレ乗らない?」

私が適当に指したのは…

「ジェットコースター?お前、乗れんのか?」

「絶叫系は大丈夫!!」

「ふうん……」

そして、2時間ちよつと並ぶ。

いつもの話題で話し込む。

やっぱり、楽しいなあ、新一と話すの……

新一が引っ越してから、生活がつまらなくなった。

そりゃ仲のよい友達と話すのは楽しかった。

でも新一との話の方がずっとずっと楽しかったから……

こっちに引っ越してきてよかったなあ

「お、もうすぐだぜ?」

前の方を覗き込んできた新一が振り向きニカツと笑う。

その笑顔に心拍数が上昇する。

ドキドキ……ドキドキ……

ちよつと苦しいけど、とっても好きな鼓動。

遂に順番が来る。

「楽しみだな」

またあの笑顔。

これからジェットコースターなのに、こんなにドキドキしちゃった
ら心臓壊れちゃうよっ！

乗り込み、安全バーを下げる。

もう、逃げられない！覚悟しなきゃ・・・

「おい、蘭？顔青ざめてるぞ？大丈夫か??」

「だ、大丈夫・・・」

ガタン・・・

動き始めて、どんどん上に上がっていく。

「お、結構高いなあ」

新一がキョロキョロ周りを見渡しながら言う。

うっっ・・・じゅ、じゅ、じゅ、じゅ、じゅ、怖いよおおおおお

!!!!!!!!!!

反射的に隣にあつた新一の手をギュツと掴み、目もグツと瞑る。

「お、おいっ!? 蘭!?!?」

新一の驚いた声が聞こえるけど、気にしない。

天辺まで上り・・・車体が傾く。

「き・・・き・・・き・・・」

遂に、下へ落ちる。

「き、きゃあああああああ!?!?!?!」

真つ逆さまに落ち・・・

その勢いで上にガガガツと上がり・・・

そのまま真横にグルグル回り・・・

上に昇っていった途端、落ち・・・

一回転して・・・

それがグルグルグルグル回っていく。

「きゃあああああああ!?!?!?!?!?!」

ますます手を握る力を強くする。

「あつ！ゴメンー！忘れてたっ」

パツと手を離す。

顔が熱い。

「す、すげーよな・・・お前」

「な、何でよ！」

「だって、あんなに揺れてんのにずっと握ったまんまだったぜ？」

「ええっ！？嘘っ」

うわっ恥ずかしい！！

「すごいよなあ」

「アンタ何に感心してんのよ」

初デート2 ～新一～

「じゃあ、次は何行く？」

蘭が尋ねてくる。

「お前は？」

「だってさつき決めたの私でしょ？だから、次は新一だよ」

あの可愛い笑顔で返ってきた。

「じゃーなあ……」

地図に目を走らせる。

おっ、いいの見つけた……

「んじゃ、コレな！」

俺が指差したのは……

~~~~~

古びた洋館。

それに伝う枯れた蔓。

歪んだ扉。

屋上にいる真つ黒のカラス。

それは、まさしく・・・

「お、お化け屋敷いつ!？」

そう・・・それは、蘭の苦手なあの化け屋敷・・・

「や、やだ!絶対!!!」

「あれえ?次は新一が決めていいって言ったのはどこの誰かなあ？」

「...」

「てことで、決まりだな〜!!」

「ええ〜っ!!」

「んじゃ、行くぞ〜」

動こうとしない蘭の手をギュッと掴んで無理やり引きずっていく。

「嫌だよお〜!!」

ギギイ…

ドアが軋む音がする。

「し、新一い…」

蘭が腕にすがりついてピタッと引っ付いてくる。

多分今自分がなにやってるか分かってねーんだろっな…

うわあああああ

顔中に包帯を巻いたミイラ男が出てくる。

「いやあああああ!!」

パツと手を放し、次は首に飛びつく蘭。

うへえっ嘘だろ!?

パシヤ

それに驚いた俺と怖くてギユツと目をつぶっている蘭は俺たちに走った光線がわからなかった。

1年後、恥ずかしい思いをするとは知らずに…

そんな調子でめぐるましく進んでいき・・・

やっと終わった・・・

終わって外に出た俺たち。

真っ赤になった俺と真っ青な蘭。

全く正反対・・・

### 初デート3 〱新一〱

あれから……

コーヒーカップにメリーゴウランド、などなど……

色んなアトラクションに乗ったりパレードを見たりと充実した時間となった。

それに入り込みすぎて、時々走る光線に気付かなかったが。

そして、今に至る……

あと15分か、もうすぐだな……

腕時計をチラチラ見る。

「新一??どうしたの??何か変だよ」

不思議そうに蘭が覗き込んでくる。

その顔にドキツとしながらも冷静に取り繕って答える。

「いや……何でも……そ、それよりさ!」



蘭の手をグツと掴み、連れて行く。

「ちよ、ちよつとお〜どこ行くのよ!?!」

驚いた顔で着いてくる。

10分ほど歩いて遊園地の真ん中にある、噴水に着く。

「ふう・・・やっと着いたか・・・」

「なあに? ココになんかあるの?」

「まあ見てりゃ分かるって」

「何それ」

「後5分くらいかな?」

「教えてくれたっていいじゃない!」

「だから、すぐ分かるって!」

「んもっ!」

「ほら、怒らない怒らない」

「怒ってないわよ!」

「そうかー?」

そんな話をしながら時間を待つ。

そろそろ・・・だな。

あと30秒・・・

20秒・・・

「10・・・9・・・8・・・7・・・6・・・5・・・4・・・  
3・・・2・・・1・・・0!!」

サアツと水の幕が上がる。

「うわあ～～!!」

蘭が可愛い声を上げる。

「すっごくいい！綺麗だね」

「蘭、こういうの好きだろ？」

「うん！すごいな」

良かった良かった・・・

期待通りの反応見れたし。

ふう・・・

1分間、2人っきりの無言の時間が続く。

幸せだな・・・そう、思った。

初デート3 〳新〳〳(後書き)

デート話は終了です！

次は何の話しよーかなあ

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8695v/>

---

新蘭パラレル 番外編

2011年9月11日12時08分発行